

体験博物館 千葉県立房総のむら館報

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりを、当時の環境の中で、直接体験することができます。

開館時間 9:00～16:30
休館日 月曜日（休日の場合は開館し、翌日休館）
年未年始（2019年12月26日～
2020年1月1日）

臨時休館日 2020年1月7日
入場料 一般300(240)円 高大150(120)円
※中学生以下と65歳以上無料。
※障害者手帳をお持ちの方と介護者1名無料。
()内は20名以上の団体料金



Kawaraban OKIDO

Vol.63

2019年（令和元年）9月29日

編集・発行

千葉県立房総のむら指定管理者

公益財団法人千葉県教育振興財団房総のむら

〒270-1506 千葉県印旛郡栄町龍角寺1028

TEL.0476-95-3333

<http://www2.chiba-muse.or.jp/MURA/>



岩屋古墳の航空写真
(南からみた様子)

今回の企画展は風土記の丘資料館で行ってきた龍角寺古墳群の展示リニューアルの成果をまとめるとともに、群中、最大の前方後円墳浅間山古墳に残された金銅製（銅板に金メッキ）の馬具や武器・武具、また銀製や金銅製の冠飾りなど、豊富な副葬品に焦点をあて、普段は県立中央博物館で常設展示されている副葬品を企画展にあわせて里帰りさせ、皆様に見ていただければと思います。

展示では、古墳時代の終わり六世紀末葉から、奈良時代のはじまり、七世紀初頭にかけてのごく限られた「印波」の歴史を、浅間山古墳を通して見ていき、なぜこの地に日本最大級の方墳「岩屋古墳」が築かれ、

「龍角寺古墳群とその時代」

特集・令和元年度企画展

龍角寺が建てられたのか、どのような人物がこの地を治め、どのような運命をたどったのか、探っていきます。

第一章「最後の前方後円墳」では、六世紀後半に造られた木更津市の金鈴塚古墳や群馬県高崎市にある観音塚古墳の副葬品を取り上げ、浅間山古墳の副葬品と比較し、展示します。金鈴塚古墳では多数の飾り大刀や冠飾りが見つかり、大刀や冠飾りは古い技法で作られていることがわかりました。この時期鉄に金銅（銅板に金メッキ）の板を貼り付け、裝飾する鉄地金銅張技法が流行しました。

第二章「副葬品からみた飛鳥時代」では、浅間山古墳から見つかった毛彫り馬具に注目し、全国的な系譜を見ていきます。浅間山古墳では金メッキを施した銅板に猪目紋・光芒紋・芝草紋・蓮華紋の紋様を毛彫りした馬具が約三十点以上見つかりました。これは群馬県高崎市にあった道上古墳から見つかった資料が典型的な例だったことから「道上型馬具」と命名され、北は青森県から、南は鹿児島県まで見つかります。

浅間山古墳で見つかった毛彫り馬具は、有名な法隆寺釈迦三尊像を製作した「鞍作止利」に代表される「止利派」と呼ばれる、

会場：風土記の丘資料館第二展示室
会期：令和元年10月12日（土）～
12月8日（日）



龍角寺仏頭

馬の鞍を作る職人と仏師によって構成された製作工房の関与が指摘されています。

第三章「大型方墳・円墳の建立」では六世紀後半ころ、下総・上総地域で主要な国造（地方を治めた官僚や在地の有力者）の拠点で大型の前方後円墳と方墳を連続して作る特徴があります。印旛沼を拠点とした印波国造は、龍角寺古墳群を形成し、浅間山古墳（全長七十八m）を造り、次いで日本最大の方墳で一辺七十八m、高さ十三mの岩屋古墳が造られます。先述した金鈴塚古墳（全長百m）の次に一辺が四十四mの方墳である松面古墳が作られました。

六世紀後半から七世紀初頭にかけて各地で前方後円墳から、大型の方墳や円墳へ主流が移るようになります。龍角寺古墳群は古墳の規模や数、副葬品をみても桁違いです。

その後、印波国造は権威の象徴といえる



浅間山古墳から出土した馬彫り毛具

房総では初の瓦葺仏教寺院、龍角寺を建立します。古墳から寺院へ権力の象徴が移り、ここから仏教が広がっていききました。これを裏付けるように龍角寺からは地名を記した瓦がみつかりました。これを文字瓦とい

い、時期は様々ですが、印波地域を指す「朝布」・香取地域を指す「加刀利」の文字が書かれて、印波国造の領域で製作を負担させたことを意味しています。

最後に、浅間山古墳から出土した銀製の冠と金銅製の冠飾りについて触れておきたいと思えます。同様の冠は近畿地方では類例がなく、北九州や常陸（現在の茨城県）に見いだされます。このことは、印波国造が北九州や常陸の勢力と関係を結んでいたことを示しています。歴史ある龍角寺古墳群は多くの謎を秘めた地であり、また古墳時代の終わりから、奈良時代にかけての古墳から寺院へと展開していく様子が良い環境で残されています。今回の企画展以降も、皆さんに関心を寄せていただければ幸いです。

(風土記の丘グループ 白井)



冠飾り復元品

上総の農家 「上総地域の虫送り」 (東上総地区)

「ゴオー」と鳴り響く夏の夜、各集落の境に面した川のほとりで、燃え上がるヤグラが闇夜に光を発し、その光に誘われるように群がってくる虫たちが、パチパチと音を立て炎の中に消えていきます。まさに「飛

んで火にいる夏の虫」です。かつては行われていたこの虫を燃やす行事は、江戸時代から行われた農事暦の一つです。

夏をむかえて稲の生育と共に虫も多数発生します。これらの虫は稲の穂や葉を食べてしまうので、イナゴなどを退治することで稲の被害を防ぐのは集落の一大行事でした。これが虫送りです。

山武市殿台地区(旧成東町)の虫送り行事をモデルとした演目を上総の農家で毎年実演しています。

殿台地区で行われていた虫送りは、毎年七月の土用(下旬頃)の夜になると、村の外れの川沿いに竹と麦わらや稲わらを使い、5m(四〜五段)を超える高さのヤグラを前日までに作ります。ヤグラは子どもたちが中心に集落の大人が指導して作ります。

当日は、松明(たいまつ)を手にした子どもたちが太鼓の拍子にあわせて、虫送りの歌を歌いつつ、集落の中心を回りながら



房総のむらで再現された虫送りの様子(上総の農家)

立てたヤグラに向かいます。着くと火をつけ虫を送ると言う行事です。

なお、集落が近接している場所は、ヤグラが他の集落に燃やされないように監視をすることも子どもたちの役目で、一晩明かすこともあったようです。

現在は、殺虫剤の進歩とともに虫送りをやめた地区がほとんどで、山武市殿台も昭和の時代までで終了してしまいました。最近では近隣の町で子ども会との協力によるイベント的な虫送りが行われています。現在では、農業機械の発達により麦わらや稲わらなど材料の確保が難しくなり、行事として虫送りを復活するにはハードルが高くなっています。

(農家グループ 平山)

虫送りの歌

な〜る虫(むしよ) 送るよ
稲たて虫(むーし) 先にたてさせて
お〜が虫(むしよ) 送るよ

(この繰り返し)

注・なる(実がなる・湧いて出てくる)
稲たつ(稲につく)

おが虫(臭いかメムシ)

※この囃し唄は、千葉県山武市殿台地区で伝承されているものです。

「下駄の鼻緒すげ」

夏、浴衣と一緒に履くことが多い下駄ですが、みなさんは履いたことがありますか。靴とは違い素肌を出して歩くのは風を感じるさわやかさがあります。

平安時代にアシダ（足駄）という下駄の名前が清少納言の枕草子に出てきます。当時は、自分の高い人が履くクツ（沓）に対して、アシダ（足駄）は一般に生活している人が身に着け、「はきもの」に身分の差があったこともわかります。

次に、下駄の材料と構造を見てみます。材料は下駄の部分により使い分けがされています。構造は足を乗せる台と台を支える歯、足を台に固定する鼻緒からできています。台部の材料は桐（きり）、杉（すぎ）、檜（ひのき）など、差し歯の材料は樫（かし）、樺（けやき）、朴（ほう）などの木材を使い、鼻緒の材料は麻などを布で覆いかぶせて作ることが多かったようです。

下駄の作り方は、材料から木取りで下駄として使う部分を切り出し、いろいろな工具で歯の位置を決めて削ります。鼻緒を上げる穴を台に開けたら、シダ科の植物であるトクサ（木賊）で全体を磨きます。全体にこの粉を塗り乾燥させます。この粉は石を細かく砕いたもので、木の表面を滑らかにします。今度はイボタロウ（伊保田蝋）を塗り付け、ウツクリ（浮造り）で磨きま



台の裏に鼻緒を固定する

す。ウツクリは植物の萱の根を集めて縛った道具です。台には3か所の穴が開いているので、歯のある裏面で鼻緒の結び目を固定していきます。結び目は台の裏に特別な結び方でほどけないようにします。最後は下駄の前にあたる一つの穴の結び目に前金をとりつけて完成させます。

房総のむらで下駄の鼻緒すげを行い、ランコロンと歩いてみてはいかがでしょうか。

（商家グループ 伊藤）

「伝統芸能入門」

伝統芸能入門は、伝統的な芸能やあそびについて分かりやすく解説をしながら体験することで、江戸庶民文化への理解を深めていくことを目的とした、今年度より始めた体験です。年四回実施し、子どもか

ら大人まで気軽に参加できる内容となっています。

今年度第一回は、五月十八日に子ども忍者教室を行いました。初回ということもあり、参加しやすかつ短時間で体験できる内容となりました。忍者になりきって、的に向かってプラスチックの手裏剣を投げるという体験です。ただ手裏剣を投げるだけでなく、子どもはもちろん、大人まで夢中になって投げていました。

第二回は、六月十五日に皿回し体験を行いました。プラスチックの皿を棒で回すのですが、これがなかなか回りません。すぐ回すことのできる人もいれば、なかなか回すことのできない人もいます。団体で来られた方などたくさんの方に参加いただけましたが、苦勞しながらも最後には皆さん回せるようになっていました。

第三回は、八月二十五日に和太鼓入門を行いました。和太鼓奏者の講師のもと、紙



小さい子も上手になりました
回せるようになりました



和太鼓入門の様子

と箸で太鼓の打ち方を練習し、その後、曲に合わせて実際に締太鼓を打ちました。「証城寺の狸囃子」と「パプリカ」の二曲を打ちましたが、「パプリカ」では子どもたちの歌声もあり、大変賑やかな演奏となりました。また外国の方にも多く参加いただくことができ、日本文化の一端に触れていただけたと思います。

次回、第四回は、来年の一月十三日に、紙切り入門を行います。一枚の紙からはさみ一つでさまざまな形が生まれていきます。ぜひ皆様も参加して体験してみてください。冬の寒い時期ですが、暖房の効いた暖かい部屋でお待ちしております。

（広報・普及グループ 高原）

令和元年度 秋のまつり開催間近!

日中の暑さはまだ続きますが、朝夕はだんだんと秋の気配を感じる季節となりました。房総のむらでは、一年を通して季節ごとのおまつりを開催しています。例年九月に開催し、皆さまに親しまれていた『稲穂まつり』ですが、昨年度より『秋のまつり』と名を改めて十月の開催となりました。江戸情緒たっぷりの房総のむらで、深まる秋をご堪能いただける様々な企画をご用意しています。

第二回目を迎える本年度は、爽やかな秋の感謝がテーマです。爽やかな季節である秋には、全国各地で収穫への感謝や祝い、翌年の豊作を祈願する祭りが行われます。房総のむらの『秋のまつり』では、大漁を祝う民俗芸能として愛宕跳ね太鼓・銚子大漁節を上演するほか、おめでたい大道芸が町並みをにぎやかに盛り上げます。



体験者の皆さん
楽しそうにポーズを決めています。

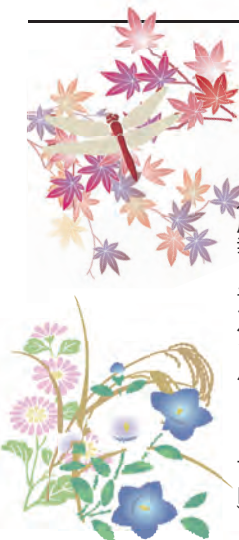
特別演目としては、中島流炮術千葉城鉄炮隊による演武を上演します。中島流炮術は千葉市立郷土博物館に所属し、流派の伝承を通じて古流炮術の研究・保存に努めています。普段は中々目にする機会がない、迫力のある貴重な演武は必見です。

お米にちなんだ爽りに関するイベントも『秋のまつり』ならではのポイントです。むらのボランティアガイドによる昔の農具体験は、解説を聞きながら懐かしい道具を用いて実際に脱穀や糶摺りを体験することができます。小さなお友達は、学校のお勉強としてもぴったりの演目です。茅葺屋根の農家で、昔のくらしに触れてみてはいかがでしょうか。国指定重要無形民俗文化財木積の藤箕製作技術など、伝統技術を持った職人による実演も見どころです。

また、子ども忍者からお姫様やお殿様新撰組に鹿鳴館ドレスなど、身も心もタイムスリップできる人気の「時代衣裳変身体験」も実施します。ドラマや映画のロケ地としても利用される房総のむらで、時代劇の主人公になってみませんか？

子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさんの『秋のまつり』は、十月五日(土)・六日(日)の開催です。ご家族ご友人お誘いあわせの上、ぜひみなさまでご来館ください。

(広報・普及グループ 古山)



まつり開催時の注意事項

まつり当日は駐車場が大変混雑いたします。公共交通機関をご利用くださいますようお願いいたします。

また、館内はテント類の設置、ボール等の遊具の持ち込みは禁止です。ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

◆編集後記◆

夏のきびしい暑さも柔らかさ、次第に秋の気配がしてまいりました。房総のむらの金木犀からも甘い香りを漂わせています。季節を感じられる素敵な香りです。

さて、今年度の企画展は房総のむらの顔のひとつでもある「龍角寺古墳群」がテーマの企画展です。出土品、関連資料、ともに充実した見ごたえのある企画展になりますので、是非お越しください。

(広報・普及グループ 根本)

令和元年度 下半期のイベント

- 秋のまつり
10月5日(土)・6日(日)
- 企画展「龍角寺古墳群とその時代」
10月12日(土)～12月8日(日)
- 歴史の里の音楽会
10月14日(月・祝)
- 房総座
10月27日(日) 落語家：柳家三之助
- ふるさとまつり
11月3日(日・祝)
- ユニセフ・ラブウォーク in 房総のむら
11月23日(土・祝)
- むらのお正月
1月2日(木)・3日(金)
- 写真展「レンズをとおした房総のむら」
12月7日(土)～2020年2月24日(月・祝)
- 伝統芸能入門
令和2年1月13日(月・祝)